長期金利、1.97%に上昇

8日の国内債券市場で長期金利の指標となる10年物国債利回りは1.97%と約18年半ぶりの高水準まで上昇した。2%に迫る勢いとなっている。背景と先行きを識者に聞いた。

オールニッポン・アセットマネジメント
チーフストラテジスト
森田 長太郎氏

2%台後半シナリオも

長期金利が2%に達するのは2026年後半とみていたが、このタイミングで近づいたのは予想外だ。高市早苗政権下の財政拡張やインフレに対する懸念が広がっていたところに、日銀の金融政策という要素が加わってきた。円安進行を受けて日銀が利上げ対応を強めざるを得ないという見通しが金利を押し上げる材料になっている。

長期金利が2%を下回るようになったのは1997年に日本が金融危機の入り口にあったころだ。ようやくその水準に戻ってきたわけだが、2%は通過点になる可能性もある。

インフレの基調を見極めた上で、長期金利がどの水準にあれば安定的な需要が出てくるのか。数年かけて金利の上下動を繰り返しながら確認していく局面に入った。

国債増発も少額にとどまり、国内の金利上昇は英「トラス・ショック」型のものではない。インフレを2%に抑えられなくなるような経済環境が実現した場合には2%台後半まで上昇するシナリオも考えられる。

金利上昇は正常化の一環であり、低金利に慣れた事業者などに何らかの影響が出ることは避けられないが、止めていい動きではない。金利上昇は日本にとって構造改革を進める良いきっかけにもなり得る。金利上昇にどう対応するか、政府は民間と手を組んで考えていく必要がある。

掲載日 2025年12月09日 日本経済新聞　朝刊 009ページ © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。

許諾番号NK001111　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。